

談黑白曲謠

夢野久作

青空文庫

謡曲嫌いの事

世の中には謡曲嫌いと称する人が大層多くて、到る処謡曲の攻撃を為して廻わつて、甚だしきに到つては謡曲亡国論などを唱える人がある。それ程でなくとも、謡曲が始まるとすぐにお尻をモジモジさせて、やがて妙な用事を思い出して御免ごうむを蒙こうむる程度の人に到つては、浜の真砂まさごの類限りなく、殆ど十中九人はそうだと云つても差し支えはあるまいと思う。現に自分もこれを幾度となく、しかも深刻に経験した一人で、こんな人々は只拙者の謡いだけが嫌いなのかも知れないが、とにかくその中にも心しんそこ底から嫌いな

人も少なくはなかつたらうと自惚うぬぼれているのである。そんな人々に、何故貴方あなたは謡曲がお嫌いですかと聞くと、誰でも先ず第一に、私には解かりませんからと云う。成る程、これも無理もなからう。謡曲の中でも比較的芝居がかりに出来ている鉢はちの木き、安宅等あたくですら、処々しよしよ三四行乃至ないし十四行宛要領の得悪い文句が挿えにくまつていて、習う本人のみならず黒くろうと人の先生方でも何だか解からぬまま唸うなつているのが多く、ましてその他の曲に到つては全部雑巾のように古びた黒い寄せ文句で出来上つているのだから、局外者が聞いて訳が解かりかねて面白くないのも尤もつともな事と思われる。

けれ共何とかして謡曲の御利益を納得させて、あわよくば一曲御所望を云わせてやろうと思ふ甲種熱心家が「でも高尚ではあり

「ませんか」と切り込むと、その返事は「でもあの声が……」と来る。ここに到つて並大抵の天狗様てんぐならば一遍にギャフンと参いつて、それなり生唾を飲み込んで我慢するところであるが、併しかし慢性の超弩級大天狗になるとこれ位の逆撃は然さして痛痒つうようを感じない。却かえつてこれを怪けしからぬという面おももちで、直ちに第三発の十六吋インチを撃ち出す。

「ハハア。それはそうでしょう、まだ妙味を御存じないから。あの声というものは一朝一夕で出る声ではありません。他の音曲では浮いた声があつても差し支えありませんが、謡曲では決してそんな声を用いる事を許しません。ですから他の音曲は面白くても賤いやしく、謡曲は面白くなくても高尚なのです。この声を出すには、

先ずこんな風に正座して身心を整齊虚名ならしめ、気海丹たんでん田に力をこう籠めて全身に及ぼし、心広く体たい胖ゆたかに、即ち至誠神明に通ずる底ていの神気を以て朗々と吟誦するのです。ですから一句の裡うちに松影婆娑ぼさたる須磨の浦を現わし、一節の裡に万人の袖を濡らす事が出来るのです」

例えばこういう風に直ぐにも始めそうに身構えをして、相手の顔をグツと睨む。ここが危機一髪、相互の生死の分れるところで、折角の深い交際が疎おろそかになったり、恩義ある人に悪感を抱かせたり、又は大切の得意を失策しくじつたりして、後悔ほぞ臍かを噬む共及ばぬような大事件が出しゅつ来たいするその最初の一刹那なのである。もしそれ撃せいでん電の機前に虎を捕え得る底ていの名外交家ならばいざ知らず、

大抵の相手ならばここで大切な用事を思い出ししたり、天氣が怪しくなったり、少く共いずれ又その中うちにという言葉を抵当にして、多少先方の心田に不満の種を蒔まいて帰るか、然らずんば先方に機先を制せられて、人間離れのした声で上かみは天堂しも下は地獄まで引きずりまわされて、散々に神経系統を攪こうらん乱されて、小便にも行けずに這ほうほう々の体で逃げ帰るのが落ちである。

自分は熟つらつら々案じて見るに、こんな連中があとで極端な謡い嫌いになって、到る処この時の經驗を吹聴してまわるから、世上に比較的謡曲嫌いが多く、下手謡曲家に捕まるのと鼈すっぽんに喰い付かれるのと同じ位の悪感を以て迎え、謡曲好きの近所に住むのと高架線のガードの下に住まうのと同様に混同して考えるような事になつ

たのではあるまいかと思う。こう考えて見ると、世上に謡曲亡國論の多いのも無理はない事で、その原因は皆斯かよう様な脅迫的謡曲家が種を蒔いたという事に帰するであろう。於此ここにおいてしどう乎斯道愛好者は宜しく冷静に熟慮反省して、決して人間界に於てこの声を発せず、換言すれば深山幽谷に去つて哀猿悲鳥を共として吟ずるか、もしくは環海の孤島に退いて狂瀾怒濤に向つて号叫すべしである。思えば吾輩も飛んでもない道楽を始めたものだ。

謡曲の廢物利用の事

この、下手謡曲に限って聞かせたい、又その相手は聞きたくない

いという心理状態は、近頃のように謡曲隆盛の昭代にその到る処
 深刻に又痛切に繰り返し繰り返し経験されて、恰あたかも欧州戦前のバ
 ルカンの如く、日露戦前の竜岩浦りゅうがんぼの如く、如何なる名外交家と
 雖いえじりえも後に瞠どうじゃく若ていたらしむる底の難解問題となつているのである
 が、併し又世上にはこの外交上の大難問題を丸まるいち一ちの大神樂だいかぐらの
 如く自由に操縦して、逆に外交上の便宜に利用し、銀山鉄壁の如
 き上官、重役の威厳を指呼の間に土崩瓦解せしめ、又は槓杆てこでも
 動かぬ長尻の訪客を咄嗟の間に紙片のように掃き出して終しまうとい
 う辣腕らつわん家が時あつてか出頭して、人天の眼を眩くらぜしむるには驚
 かされるのである。

正に毒草を変じて薬となし、糞土を煮にて醍醐ていごをなす底ていの怪手腕

と称すべしで、謡曲の教外別伝の極地、声色の境界を超越した、
 玄中の玄曲を識得した英靈漢というべしである。かくの如きに到
 っては、到底吾人味みそ噌粕輩かすはいは申すに及ばず、斯道五流の大家と雖
 も倒退三千里で、畢ひつきよう 竟ひやくせつ 百 説ふえただしきしや 不会只識者みちの知に任せ、達
 者の用に委まかして、遥はるかに三拜九拜して退くより他に途みちはないのであ
 る。

聴えらき手は注意して扱えらむべき事

自分も実は大の聴聞脅迫党で、今まで随分謡曲嫌いを製造した
 覚えがあるが、ここに只一つ無類飛び切りの謡曲好きに出会でくわして、

却てへトへトに悩まされて懲り懲りした珍談がある。その謡い好きというのは拙者の祖母で、今年九十三歳になつて中風の気味で郷里福岡の片かたほと傍りの伯父の家に寝ているのであるが、これをこの間久方振りに帰郷した時見舞いに行つて見ると、折おりふし節伯父伯母は下女を残して外出の留守で、小供は皆学校に行つているし、祖母は只一人奥の六畳に霞んだ眼をして寝ているところであつた。拙者は兼てから祖母が非常に記憶力が減退していると聞いていたが、会つて見ると左程でもなく、よく拙者を記憶していて、いつ東京から帰つたかとか、幾つになつたかとか、嫁はまだ貰わぬかなど聞いた。そうして最後に、

「妾わたしも最早もはや余程長い事こうやっていて退屈してなあ」

と云つた。この時に自分は不図ふとこの祖母が謡い好きであつた事を思い出して、忽ち胸中に湧き出した野心が半天みなぎに漲り渡ると、思い切つて独逸流に、

「お祖母様ぼあ。私は東京に行つて謡いを稽古して来ました。御退屈なら伯父が帰るまでに一ツ謡つて見ましようか」

と切り出した。その時の祖母の喜びようと来たら全く地獄で仏に会つたようであつたが、自分も亦御同様またで全くこの祖母を拝みたい位に思つたのである。

「併しかし何を謡いましようか」

と尋ねて見ると、祖母はその濁つた眼を天井に放つてしきりに考えている様子であつたが、

「ああ、それぞれ、死んだ爺さんが謡い御座った、あの、それ……四方にパツと散るかと思えてというあれを」

「富士太鼓ですか」

「それぞれ、その富士太鼓——」

果然、富士太鼓は拙者の得意の出し物であつた。今は何条猶予すべき、直ぐに偉容を張つて謡いおわ了つたが、我れながら会心の出来で、殊に、

「乱れ髪乱れ笠、思いはいつか忘れむと」

のあたり、即座に天てんかん関地軸を撲落して、唯一人の美人を天の

一方に仰ぐような心地がした。祖母も余程感に堪えた様子で、二ツ切りの手拭を顔に押し当てて涙を拭いながら、

「ああ、久し振りで面白かった。死んだ爺さんが生きて御座つたらなあ……。今一つ聞かせて」

と云つた。拙者はこの言葉を聞いて正直のところ涙が出そうであつた。自分が謡曲を始めてから今日までこれ位に感動を他人に与えた事はないので、全く自他の本懐といい祖母への孝養といい申し分のない大成功であつた。ところが扱さて、

「今度は何を謡いましょう」

と尋ねて見ると、祖母は又もや涙を拭いながら、

「お前はあの富士太鼓を知つていなさるかの」

と云つた。自分は聊いささか驚いて、

「今うたいましたよ、それは」

「何をば」

「その富士太鼓をです」

「ああ、その富士太鼓富士太鼓。妾はようよう思い出した。死んだ爺さんはそれが大好きで、毎日毎日謡い御座った。あれを一ツ」

これには自分も全くうんざりして終しまった。真逆まさか祖母の記憶力がここまで消耗していようとは夢にも思わなかったが、併し謡わないよりは増ましたと思つて又一番相勤あいめた。けれ共その終い際になつたら、もともと厭気がさしている上に疲れているものだから、声が甲かんに釣り上つてへトへトになつてすっかり汗を掻いてしまつた。そうしてやつと謡つて仕舞うと、祖母は又もや涙を拭いながら、

「ああ、久し振りで面白かった。死んだ祖父様じいが生きて御座ったらなあ。それでは今度は富士太鼓を一ツつ何卒どうぞ」

と云った。自分はとうとう死に物狂いの体ていで今一番富士太鼓を謡って、伯父伯母が帰らぬ内に這々の体ていで退却した。

そうして聴き手を扱えらむべきものだと、この時つくづく感じた事であつた。

夢中運動の事

電車の中などでよく見受けるが、分別盛り以上の年輩で一廉ひとかどの服装をして髯ひげなどを生やしている人が、夢を見るような眼付で

天の一方を睨みつつ、お経の化け物見たいな声を高く低く出しながら、手や足を痙攣けいれん的に動かして拍子を取っている御仁がある。知らぬものは一寸ちよつと驚くが、これは狐付きでも何でも無い。謡曲の第三期中毒者で、些すこしも危険の恐れのない発作症状を今現わしているところなのである。謡曲中毒もここまで来ると既に病膏やまいこ盲うごうに入ったというもので、頓服とんぷく的忠告や注射的批難位では中々治るものでない。丁度モルヒネだの阿片の中毒と同じで、止めようと思ってもガタンガタンが四楽しらくに聞こえ、ゴドンゴドンが地謡いに聞こえて、唇自ずからふるえ、手足自ずから動き、遂に身心は恍惚として脱落し去って、露西亞ロシアで革命党が爆裂弾を投げようが、日本で政府党が選挙に勝とうが、又は乗り換えを忘れよう

が、終点まで運ばれようが委細構わず、紅塵万丈の熱鬧世界を遠く白雲緬邈めんぱくの地平線下に委棄きたし来つて、悠々として「四条五条の橋の上」に遊び、「愛鷹山あしたかや富士の高峰たかね」の上はるかなる国うかとうせんに羽化登仙し去るのである。

南無阿弥陀仏もよかろう。アーメンも面白かろう。天理教の蒟こんにやくおどり、静坐法の癡癡舞踊、皆それぞれ相当の境界がある。けれ共世の中にこれ位高尚で、玄妙で、無害で楽しみの深い境界に容易に到達し得る宗旨は滅多にあるまい。拙者は大方の諸君が一日も早くこの宗旨に帰依して、九段の本山の大会に随喜渴仰かつごうの涙を以て臨んで、用いて尽きず施して足らざる事なき大歡喜の至樂うを享けられむ事を希望して息まぬものである。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：小林徹

2001年10月29日公開

2006年3月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

談白黒曲謡

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>